

# 琉球王権と神話の歴史地理学的研究

末吉 亜梨沙

(佐々木 高弘ゼミ)

目次

はじめに

第1章 キンマモン

(1) キンマモンの伝承

(2) キンマモンに関する論文

(3) キンマモンについての聞き取り調査

第2章 蛇髻入

(1) 日本の蛇髻入

(2) 沖縄の蛇髻入

第3章 沖縄の蛇の棲家としての聖地

(1) 漲水御嶽

(2) 普天満宮

(3) 蛇髻入とキンマモン

終わりに

## はじめに

沖縄には昔から様々な神が存在している。代表的なのは琉球の最高神とされるアマミキヨや籠の神である火の神（ヒヌカン）である。その神々のなかにキンマモンという神が存在している。この神は琉球の神祇に関する一番古い史料である『琉球神道記』にも記載されている神である。しかし、そのキンマモンという神はフィールドワークで聞き取りを行っても知る人はなく、御嶽の神名を表にしてまとめても現れず、今現在沖縄で祀られていないため、現代の沖縄には存在していないのだ。地元の人々もキンマモンという神がいたということを知っている人は居ないし、沖縄で育った私自身も『琉球神道記』を読むまで知らなかった。だが、琉球王国初の正史である『中山世鑑』をはじめ、様々な書物に『琉球神道記』のなかの「キンマモン事」に記載されている創世神話を利用して、当時の人々にとっても『琉球神道記』は昔の琉球の姿を見出せる重要なものであったと思われる。キンマモンという神についての史料は必ずしも多くなく、その多くは歴史書であり、その

ためキンマモンについて取り上げている論文も少ない。

話しは変わるが、日本の国家創世神であるオオモノヌシは国造りを行なっている際、海の向こうから光り輝く神様として現れて、三輪山に自分を祭るよう希望したとされており、海からやってきたことや蛇神であることなど似通った部分があるため、キンマモンに近いと思われる。また、沖縄には蛇髻入・苧環型の伝承が多くみられる。そして沖縄の蛇髻入には神の化身である蛇の子を身ごもった娘が子どもを生んだ後はその子どもも神となったという話と、化け物である蛇の子を身ごもった娘が海に飛び込んで身を清め、蛇の子供を流したという話の2種類ある。このうちの後者の話には浜下りという行事が関連している。後者の話では神ではなく動物としての蛇が出現しており、浜下りが特に女性が海に関する儀礼であることや蛇に関係することからキンマモンに繋げることができるのではないかとと思われる。

本論ではキンマモンについての史料や論文、聞き取り調査の内容をあげていくとともに、沖縄の蛇髻入をみながらキンマモンと蛇髻入をつなげていきたい。

## 第1章 キンマモン

### (1) キンマモンの伝承

まず、キンマモンについて記載されている史料を紹介しながら伝承を紹介することにする。キンマモンが史料のなかに初めて登場したのは、袋中が書いた『琉球神道記』の巻五「キンマモン事」のことである。

袋中（1552～1639年）とは、京都の浄土宗の仏僧である。1603年に中国に渡航するために便船を求めて琉球へ渡るが、中国への便船は見つけられずに3年間ものあいだ、中国への便船を待ち

ながら琉球に滞在することとなった。琉球滞在中の3年間のうちに琉球での浄土宗布教に努めており、その期間に馬幸明という人物に頼まれて『琉球神道記』と『琉球往来』を作成した。結局1606年に帰国しており、中国に渡ることは叶わなかった<sup>(1)</sup>。

『琉球神道記』とは、上記に記載したように袋中が琉球滞在中に頼まれて編集し、1605年に完成した書物である。この『琉球神道記』という書物は袋中が仏教徒であるためか仏教的性質をもち、全五巻で形成されている。内容を簡単にまとめると、第一巻は仏教的な世界観による世界の成り立ちについて記しており、第二巻では竺土(インド)について仏法を説いている。第三巻では震旦(中国)について王法を説き、第四巻では琉球の伽藍の本尊をあげて垂迹の本地を明らかにしている。そして第五巻で琉球の神祇をあげている。第四巻から琉球についての記述が始まっているが、琉球の固有の宗教について記されているわけではない。こういったことから、琉球の神祇が記されているのは五巻のみとなっている<sup>(2)</sup>。また、五巻が琉球の神祇について記されていることは上記に書いたが、そのなかでも琉球に関する話とそれ以外を分類することが出来る。

第五巻には題目が波上権現事、沖ノ権現事、尸棄那権現事、普天間権現事、末吉権現事、天久権現事、八幡大菩薩事、天満大政威徳大自在天神事、天照大神事、天妃事、天巽事、道祖神事、火神事、権者・実者事、疫神事、神楽事、鳥居事、駒犬事、鹿嶋明神事、諏訪明神事、住吉明神事、キンマモン事の22段あるのだが、琉球王国に関する話が書かれているものはその22段のうちの波上権現事、沖ノ権現事、尸棄那権現事、普天間権現事、末吉権現事、天久権現事、八幡大菩薩事、天満大政威徳大自在天神事、天照大神事、天妃事、キンマモン事の11段のみである。そして、その11段のなかでもキンマモン事以外の10段に登場する神というのが、熊野権現・八幡菩薩・天妃神・天神・天照大神といったように日本から勧請された神や中国から渡来した神であり、琉球の神が登場するのはキンマモン事の段のみなのである<sup>(3)</sup>。また、『琉球神道記』は袋中の聞き書きの様式をしている。

改めてキンマモンについての伝承であるが、下記のように記されている。

伝承① 昔、この国のはじめ、まだ人のいない時に、天から男と女の二人が降りた。男をシネリキュ、女をアマミキュという。二人は小屋を並べて住んだ。この時、この島はなお小さくて、波に漂っていた。そこでダシカという木を現して、それが繁殖して山の形を作った。次にシキュという草を繁茂させ、また阿檀という木を植えて、ようやく国の形とした。

二人は、性交はしなかったが、住所が並んでいるので、行き来する風をたよりに、女が妊娠した。遂に三子を生んだ。一人目は、所々の主の始めである。二人目は、祝の始めである。三人目は、土民の始めである。この時、火がなかった。龍宮から火をもらってきて、国が完成し、人間が生長して、守護の神が現われたもうた。キンマモンと称えたとまつるのである。この神は、海底を宮とする。毎月出現されて、託宣がある。所々の拝林にお遊びになる。採り物は御萱である。唄は御唄である<sup>(4)</sup>。

キンマモンに、陰陽の二神がある。天から下りたもうのを、ギライカナイのキンマモンといい、海から上がりたもうのを、オボツカグラのキンマモンという<sup>(5)</sup>。

次に羽地朝秀が編纂した『中山世鑑』を見ていく。

羽地朝秀(1617～75年)とは、第二尚氏王統時代(江戸時代前期)の琉球の政治家である。若い頃は薩摩に留学していたらしく、そのことから日本人と琉球の人は民族的には同一であるとする説の日琉同祖論を唱えており、琉球の独自の風習に批判的であった。また、王家の祖先だけではなく琉球の人々の祖先は日本からの渡来人であるとしている。薩摩による琉球侵攻によって疲弊した国を肅正するために財産再建、政教分離などの国家立て直しの政策をおこなう。具体的な政策には聞得大君の格下げ、諸祭事の縮小、役職の傾城買いの禁止などがある<sup>(6)</sup>。

『中山世鑑』とは、羽地朝秀(尚象賢)が王名

をうけて編纂を開始し、1650年に成立した琉球王国の初の正史のことである。全六巻であり、『中山世鑑』を編集する際に琉球王国独自の史料である『琉球神道記』のほかに、源為朝が琉球に逃れ、その子供が琉球王家の始祖である舜天になったとする記述があることから、中国冊封使の記録、『保元物語』『平治物語』などを参考にしたと見られている<sup>(7)</sup>。国独自の史料のみではなく、日本の書物を参考にした理由はおそらく、羽地朝秀が上記で記載したように日琉同祖論の考えを持っているため、源為朝を王の血筋に組み込むことで日本人と琉球人が民族的に同一であるということを琉球の人々に示すためであろう。

伝承② 天帝、宜ケルハ、爾ガ知タル如ク、天中ニ神多シト云ヘドモ、可下神無シ。サレバトテ、黙止スベキニ非ズトテ、天帝ノ御子、男女ヲゾ、下給。

二人、陰陽和合ハ無レドモ、居處、並ガ故ニ、往来ノ風ヲ縁シテ、女神胎給、遂ニ三男二女ヲゾ、生給。

長男ハ國ノ主ノ始也。是ヲ天孫氏ト號ス。

二男ハ諸侯ノ始。三男ハ百姓ノ始。一女ハ君々ノ始。二女ハ祝々ノ始也。其ヨリシテゾ、夫婦婚合ノ儀ハ、アラハレケリ。

守護ノ神モ現ジ給。キミマモントゾ、稱シ奉ル。キミマモント申スニ、陰陽ノ二神アリ。ヲボツカグラノ神ト申スハ、天神也。ギライカナイト申スハ、海神也<sup>(8)</sup>

誕生する子どもの数などに違いはあれども、琉球開闢についてほとんど『琉球神道記』の内容をそのままで使用されていることがわかる。

次に蔡鐸が編纂した『中山世譜』である。

蔡鐸(1644～1724年)とは、江戸時代前期の琉球の儒学者であり、歴史家でもある人物である<sup>(9)</sup>。息子に宰相となった蔡温がいる。

『中山世譜』とは、1697年に蔡鐸を中心として編纂が開始され、1701年に成立した正史のことである。主に正巻十四巻、附巻七巻に分かれており、正巻は歴代の王の伝記と中国との交渉記事をまとめ、附巻は尚清王から尚泰までの薩摩藩との関係を中心にまとめた部分に分かれている<sup>(10)</sup>

伝承③ 當時風俗淳樸。民衆端慤。有神出見。而託遊者。國人呼之。曰君眞者。

河内君眞物者。海神也。(此神春三月。夏六月。秋九月。冬十二月。一年四次出見。是亦護衛國運之神也。每季七日託遊。故俗曰七之公事)<sup>(11)</sup>

こちらも『中山世鑑』と同じく、国家創世神話について内容は変わりなく、キンマモンについてもそこまで変化はない。しかしこの書物からキンマモンの登場する時期が詳しく記載されるようになっていく。

次は鄭秉哲によって編纂された『球陽』である。鄭秉哲とは、琉球にいた中国帰化人のことである。

『球陽』とは、鄭秉哲たちによって編纂され、1745年に成立(後に1876年まで追記が行なわれることとなる)した琉球王国の王国編年史である。この書物は正巻二十二巻、付巻三巻で成り立っており、外巻として『遺老説伝』が存在する。王家・国事に関することをはじめ、政治・経済・社会・文化の社会事象、天災地変の自然現象に至るまで細かく記載されている一方で、中山統一以前の歴史については簡略化されているため詳しく知ることはできない<sup>(12)</sup>。

伝承④ 蓋し我が国開闢の初、海浪汎濫し、居處するに足らず。時に一男一女有り、大荒の際に生ず。男は志仁礼久と名づけ、女は阿摩弥姑と名づく。土石を運び、樹木を植ゑ、用て海浪を防ぎ、而して嶽森始まる。嶽森既に成りて人物繁艱す。然れども当時の俗、穴居野處し、物と相友し、价傷の心有る無し。歴年既に久しく、人民機智ありて、物始めて敵と為る。時に復一人の首めて出でて群類を分ち、民居を定むる者有り。叫びて天帝子と称す。天帝子、三男二女を生む。長男は天孫氏と為る。国君の始なり。二男は按司の始と為る(按司は即ち中朝の諸侯の類の如し)。三男は百姓の始と為る。長女は君君の始と為る(君は、婦女数十人をして各神職を掌らしむ。故に之れを合称して君君と曰ふ。康熙の初、議して其の数を減ず。而して今数職の存する有り)。二女は祝祝の始と為る(祝は

亦神職を掌る者の称なり。祝祝は諸郡諸村、各婦女の神職を掌る者有り。故に之れを合称して祝祝と曰ふ。今に至るも尚存す。而して倫道始まる。

風俗淳僕、民習端慤なれば、神出見して託遊する者有り。国人之れを呼びて君真物と曰ふ。夫れ諸神の託遊は、必ず婦女に係る。故に国人亦之れを尊びて女君と曰ふ。

神、婦人の二夫せざる者を以て尸と為す。降れば即ち数々靈異を著はす。国に不良有れば、神輒ち王に告げ、其の人を指して之れを摘へしむ。故に国人竦然として畏憚し、敢へて侮侵せず。其の神一ならず。名も亦同じからず。

河内君真物は海神なり(此の神、春三月・夏六月・秋九月・冬十二月の一年に四次出見す。是れも亦国運を護衛するの神なり。毎季七日託遊す。故に俗に七の公事と曰ふ)<sup>(13)</sup>。

伝承⑤ 一、往古の世、与那城郡屋部村は、毎年屢火災に遭ひ、房屋を燬失す。民其の憂に勝へず。一日、君真物の出現する有り、村民に囁して曰く、屢火災有るは、乃ち屋部の名有るを以てなり。若し屋部の名を改めざれば、其の火災を免るるを得ざらん。早く名を改め、以て屋慶名とさけば、即ち火災以て止むべしと。村民之れを聞き、拝謝し、已に改めて屋慶名と叫ぶ。此れより以後、未だ嘗て火災有らずとしか云ふ。<sup>(14)</sup>

伝承⑥ 一、往昔の世、聞得大君加那志、侍女数十を帯び、海船に坐駕して久高島に赴き、以て祭祀を行はんとす。往きて中洋にに抵るのとき、陡して逆風に遭ひ、日本に漂至す。已に歳月を経るも、杳然として跡無し。是の時、琉球は、旱魃甚だ極まり、五穀登らず、民人困苦す。是れに由りて諸覘巫輩を収集し、頻々として之れを問ふに、覘巫僉曰く、想ふに是れ聞得大君加那志、風の為に漂せられ、他国に滞在するの故ならんと。一日、君摩物神有りて曰く、今、大君加那志、日本に逗在す。汝等、須らく早く船

を撥して日本に往き至り、以て迎回を為すべしと。是れに于て場天祝女、命を奉じて船頭と為り、大城祝女、船筑と為りて、女数十人を帯び、駕船開洋し、日本国に赴く。順風吹き起り、数日を閲せずして、直ちに一処に至り、恭しく大君の芳顔を覲るを得たり。即ち場天祝女、御前に跪きて曰く、妾等特に此の地に来り、大君加那志を迎接す。願はくは早く故郷に還りたまへと。大君加那志、遂に他と共に還棹し、場天浜に回り至る。沙明嘉、海辺に出で、恭しく酒盃を献じ、以て喜迎の礼を為す。大君加那志、本処に帰るを欲せず、但大里郡与那原村に、宮舎を結構して住居す。後、此に薨じ、即ち其の靈骨を収め、三津嶽に埋葬す。人尊信して神と為す。又曰ふ。琉球の海、原、多志好魚無し。場天祝女、日本より此の魚を帯び来りて、球の海に帰回す。是れに由りて場天祝女、場天浜に在る時は、此の魚も此の浜に浮来し、又与那原に在る時は、亦彼の浜に浮来し、但に其の祝女の在る所に随ひて浮来すと<sup>(15)</sup>。

次に『琉球国由来記』である。

『琉球国由来記』とは、1713年に琉球王国の編纂した書物であり、全二十一巻で構成されている。この書物は国家儀礼をはじめ、各地方の年中行事や宗教儀礼、諸事由来を中心に編集されている<sup>(16)</sup>。

伝承⑦ コバウノ嶽 神名 ワカツカサノ御イベ 今婦仁村

謝名村ニ、アフリノハナト云所アリ。昔、君真物出現之時、此所ニ黄冷傘立時ハ、コバウノ嶽ニ赤冷傘立、又コバウノ嶽ニ黄冷傘立時ハ、此所ニ赤冷傘立ト、申伝也<sup>(17)</sup>。

伝承⑧ アフリ嶽 神名 カンナカノ御イベ 辺戸村

昔、君真物出現之時、今婦仁間切アフリハナニ冷傘立時、コバウノ嶽ニ冷傘立、又アフリ嶽ニ立ト申伝也。神道記ニ曰。「新神出給フ。キミテズリト申ス。出ベキ前ニ、国上之深山ニ、アフリト云物現ゼリ。其山ヲ即、アフリ岳ト云。五色鮮潔癖ニシテ、種々莊嚴ナリ。三ノ岳ニ三

本也。大ニシテ一山ヲ覆尽ス。八九月ノ間也。唯一日ニシテ終ル。村人飛脚シテ王殿ニ奏ス。其十月ハ必出給フ也。時ニ、託女ノ装束モ、王臣モ同也。鼓ヲ拍、謳ヲウタフ。皆以、龍宮様ナリ。王宮ノ庭ヲ会所トス。傘三十余ヲ立ツ。大ハ高コト七八丈、輪ハ径十尋余。小ハ一丈計」<sup>(18)</sup>

伝承⑨ タケナイヨリメ 十二月、島中ニテ日撰仕り申。遊一日ノ事

右、カナイノキンマモノ御祭用ニ、三年ニ一度、神酒・食肴相調、村々神アシアゲニタモト座仕、ノロ・掟申申請、御祭仕り、ヲエカ人・サバクリ、御拜四ツ仕也。由来伝ワラズ<sup>(19)</sup>。

伝承⑩ イシキナハ按司、子息三人。嫡子久米中城按司、二男久米具志川按司、兩人ハ、本妻ノ腹也。妾ハ粟国ノ生産人。此腹ニ、三男ガサスチヤラ按司、玉那覇村ニテ誕生。臍ハ彼所ニ理由ニ為リテ、其上ニ蘇鉄植付、今ニ之有ル也。右、ガサスチヤラ按司、在所トシテハ嶽ノ由也。此人天姿美男、器量モ人ニ勝レタル故、キミマモノ出現ノ時、男女童依ラズ、彼按司御取持、男女童兎迄、渴仰シケルトナリ<sup>(20)</sup>。

キンマモンに関する事例の多くは上記に書かれているように、国が完成した後に守護の神として出現したとされている。これは最初に『琉球神道記』に書かれている国家創世神話を使用したからであろう。また、キンマモンはギライカナイのキンマモンとオボツカグラのキンマモンの二種類が存在していると記載されている。ギライカナイは海の彼方の楽土のことであり、オボツカグラは天上にある神の在所のことを指す。このことから、キンマモンは海神と天神の両方を併せ持つ神であったと思われる。

また、キンマモンは琉球の最高神女である聞得大君が国王の国事や政について神意を伺うときに出現するとされる神であるとされる<sup>(21)</sup>。

## (2) キンマモンに関する論文

キンマモンについては地元にも伝わっておらず、キンマモンについての史料も少ないためかキ

ンマモンに関する論文も少ない。

伊波普猷は、君真物はもとイベ即ち国つ神に対して、海神または天神に用いられたのが、カナイの君真物の祭が重要視された為に、もっぱらそれにのみ用いられたに違いない<sup>(22)</sup>としており、キンマモンは天神と海神の両方で用いられていたのが、海神の祭の方が重要視された為に、君真物は海神として扱われるようになったとしている。

真喜志瑤子は、キンマモンという名の神が、実際に機能したのも十六世紀頃にはじまると推測してよいのではないだろうか<sup>(23)</sup>としている。

下野敏見は、この君真物儀礼はノロを中心とする神女たちによる演出であり、ノロ制度の成立と密接な関係があると思われるとしている。ノロ制度が普及しているのは琉球文化圏でも奄美諸島と沖縄諸島であるが、この地域にトカラ列島や八重山諸島に見るような来訪神行事が少ないのは、ノロを中心とする神女自身がカブリカズラをかぶり、大扇を持って盛装し、君真物として出現するからではないかと考えられる。つまり、神女たちが来訪神であるとしており<sup>(24)</sup>、キンマモンと神女がとても深く結びついているということをかかわせる。

渡辺匡一は、海底の宮から上がり、所々の拝所(御嶽)に顕れる琉球の神、キンマモンは竜宮からやってくる龍神(蛇神)に他ならないとしており、「天ヨリ下給フ」ギライカナイノキンマモン(天龍)と、「海ヨリ上給フ」オボツカグラノキンマモン(地龍)の陰陽二神からなるキンマモンは、海底の宮、すなわち竜宮からやってくる龍神である<sup>(25)</sup>としている。

## (3) キンマモンについての聞き取り調査

キンマモンについての聞き取り調査を行なう際、キンマモンについての史料を参考にした場合、『琉球国由来記』でキンマモン出現時に冷傘が立つ際に場所がはっきりと記載されていた今帰仁間切今帰仁村の御嶽であるコバウノ嶽と国頭間切切戸村の御嶽であるアフリハナに焦点を絞ることにした。そのため、その2ヶ所での聞き取り調査を行なうことにした。

コバウノ嶽が存在している今帰仁間切今帰仁村というのは、現在で言う沖縄県今帰仁村今泊で





写真2 安須森 (末吉撮影)



図2 辺戸の位置

(角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』角川学芸出版, 2009, 866 頁)

下りという行事が関連しており、この儀礼が海に関するものであることや特に女性に関する儀礼であること、儀礼の由来として蛇に関係することからキンマモンに繋げることができるのではないかと思います。蛇髻入とキンマモンの関連性を取り上げることにした。

## 第2章 蛇髻入

### (1) 日本の蛇髻入

蛇髻入とは異類婚姻譚の一つで、蛇と人間の娘との結婚の話のことを指す。蛇髻入の話で有名なのは奈良県の三輪山にまつわる三輪山伝説であろう。

蛇髻入には「苧環型」という話型が存在する。苧環型の苧環というのが、紡いだ麻の糸を巻いて玉にしたものをさしている。この話型の特徴はある娘のもとに毎晩見知らぬ男が通い明け方に帰っていき、娘が次第に痩せ衰えていく。それを心配した親が娘に糸を通した針を通して男の着物の裾に刺させて、翌朝にその糸を辿ると山奥の洞穴まで続いていてそこには針が刺さった蛇がいる、というものである<sup>(27)</sup>。大まかな話の流れとしては苧環型でいいのだが、その他にもいくつかの話型に分けることができる。男と娘の間に子どもが宿って生まれ、その子どもが英雄または神になるとされているのが「子供出世型」といわれている話型である。通ってくる男が神などではないため、娘が男を殺害する話型を「退治型」という。糸を辿って行く部分までは一緒だが、蛇の会話を聞いてしまうのを「立ち聞き型」とする。そしてその立ち聞きした情報によって子どもを下ろす方法を知り、その通りにすると子どもを下ろすことができたというのが「たらい子型」という話型である。

「子供出世型」がこの話型のなかで一番神話としての内容が色濃く残っている話であり、「退治型」というのも三輪山の神婚神話の変容として見ると、神が妖怪へと零落する説が当てはまり、神話としての内容が残っているといえる。「立ち聞き型」や「たらい子型」は子どもを下ろす人間側の話が中心となり、時代や場所、登場人物について明確に書かれていないために昔話として分類される<sup>(28)</sup>。

### (2) 沖縄の蛇髻入

それではここで沖縄の蛇髻入を見てみることにする。

沖縄の蛇髻入の話は数多くあるが後付資料で書いてあるように、蛇の棲家になっている場所の代

表的なのが宮古島だと漲水御嶽の洞穴、普天間だと普天満宮なのである。

儀礼として記載されている浜下りとは旧暦三月三日に行なう沖縄の年中行事の一つで、三月三日に女性のみだけではなく家族連れで潮干狩りをすることによって、不浄を祓って健康を願う行事である。しかし、元来の起源説話では女性が浜において身を清めるといふものであった。この行事の由来となった起源説話というのが、むかし、ある娘のところに夜な夜な美青年がかよってくるので、不審に思った家族の者があとを追ってみると、この美青年は実はアカマターとよばれる蛇の化身であった。このアカマター自身の巣に帰りとりこにしている娘の自慢を仲間にしてしているのを、娘の家族がききつけ、娘を急いで浜につれてゆくと案の定、アカマターの子が体内から出て来て娘は穢れから逃れることができた、というものである<sup>(29)</sup>。

この話をもっと細かく記していくと、ある家の娘が相手もないのに腹がでてきた。不審に思った家族が娘に話を聞いてみると、娘のもとに夜な夜な美青年が通ってくるが誰かは分からないと言う。そこで親が青年の後を追ってみると、そこにはアカマターと呼ばれる蛇の化身がいた。親はそのアカマターが他の蛇に自慢しているときに「娘が浜に下りなければ（アカマターの）子どもが生まれる」と言ったのを聞いた。そこで娘を浜に下りさせて浜下りをする、胎内に宿っていた蛇の子は流れ出ていった。それ以来、三月三日に浜下りをするようになったとされている。

上記の浜下りの由来は立ち聞き型とたらい子型の話型であることははっきりしている。由来の話の後半に関しては、上記に記載した話の通りにアカマターたちの話の内容を聞くことによって胎内の子を下ろさせる方法を知るほかに、近所のノロからの助言や親の機転、娘の機転によって腹の子を墮胎させる浜下りの由来の話がある。そして沖縄の子供出世型以外の蛇髣入の話にはほとんどに浜下りの儀礼が登場する。つまり沖縄の蛇髣入の話と浜下りという行事というのは関連性を持っていることがうかがえる。

### 第3章 蛇髣入とキンマモン

#### (1) 漲水御嶽

漲水御嶽とは、現在の宮古島平良市西崎にある漲水港の手前にある宮古島のなかで第一の御嶽とされている御嶽のことである。前章で蛇の棲家として出てきた「ツカサヤー」というのは漲水御嶽のことであり、この「ツカサヤー」というのは「司家」と書く<sup>(30)</sup>。この「司」というのは神女を指している。

漲水御嶽の伝承は下記のような話である。

昔ね、平良の「南の底」という所に、——宮古口で言うと、パイヌスックに——とてもいい容貌の、美しい、十四、五歳の娘がいたそう。だけど、それがもう、お腹が大きくなっているから、母ちゃんがまあ、心配して、「どうして、お前の腹は、大きくなっているのか。早く父親を知らせよ」と言うと、娘は、「わたしの子の親は、あなたは誰か知らせてと言っても、名前も言わず、誰とも言わないので知らないが、とても美しい青年なのだがねまあ、名前も言わずに、毎晩しので来ているのだがねえ、知れないうちに、お腹が大きくなっている」と。「実はわたくしも知らない」と言うので、両親は心配して、母親も父親も心配して、「じゃ、来たら千尋の糸を針に通して、わたしが渡すから、男が来たら、そのカタカシャカラズに、針を刺して行かせなさい」と、その千尋の糸を「針を通すから、それを頭に刺して行かせろ」と言うので、その娘は、母ちゃん父ちゃんたちが言ったことを、昼言ったことを忘れずに、まあまた、その晩男が来ているので、そこへ来ているので、頭へまあ、針を刺して、行かせておくとね、まあ、翌朝には、お父ちゃんと母ちゃんと、その糸の通っているところをまあ、行って見ると、漲水神社へ向ってまあ、あその、今の漲水神社へ向って行ってね、深い洞穴があるので、そこへ入って行ってある跡が残っている、行って見ると、まあ五メートルくらいの大きな蛇が、大蛇が、横たわっている、というので、あれまあ、娘はびっくりして、まあ、お父ちゃんお母ちゃんもびっくりしてまあ、そ



こに立っていて、ようやく落ち着いて、自分の家へ帰って来て、

「まあ、どうしようか」と心配しているとね、まあ夜、もちろんその晩には、若い、とても美しい青年は、来なかったそうだ。その晩は来なかったというので、まあ、娘は、夢を見たのだがね、

「やがて、女の子を三人生むはずなので、それが成長して、三年たったら、満三年がたったなら、あのツカサヤーに連れて来て、おきなさい」と、「連れて来い」と教えたそうだ。教えたというのでね、ちょうどまあ、臨月が来たというので、旧暦の三月巳の日に、まあ生み月が来たというので、浜の七ヶ所、干瀬の七ヶ所、七浜七干瀬を娘に踏ませて、海の潮を汲んで来て、その娘に水を浴びせるとまあ、生み月の三月になると、女の子三人生まれたそうだ。

生まれたというので、それを育てて、まあ三ヶ年、すくすくと成長して、大きくなったというので、満三年目には行って、ツカサヤーの夢にみた、仰せの通りにさあ、行って、ツカサヤーに行くとな、もう太陽と言おうか、お月さまと言おうか、あんな目をした、とてもまあ、大きい蛇が出て来て、いたのだがまあ、この娘の、母ちゃんと父ちゃんは、恐れているのだがね、この子どもの三人は、まあ全然恐れずにいて、頭にとりすがるものもあり、胴に抱き着くものもあり、尻尾に抱き着くものもあり、その三歳の女の子の三人は、そうしていてね、しばらくはいとしげにして、この蛇もまあ大きい声でうなり、ツカサヤーの岩の上に、頭を載せて、胴をイビに載せてまあ、離しがたいようにまあ、親子の愛情深げに、涙をこぼしていたそうだ。その蛇もそうしていたというのだがね、しばらくしてからまあ、その蛇は天へ昇って行った、大蛇はよねえ。また子どもの三人は、神社内に入ったというのだがね、まあそこでまあ、全然、見えずに、そのままいなくなったそうだ<sup>(31)</sup>。

司家に出現する蛇が天へ昇っていくことから、蛇が天神であると見ることが出来る。また、「司」という字から神女と関係すると考えられる。

漲水御嶽の伝承では登場する蛇が天上に昇る、

つまり蛇が神であり、生んだ子どもたちも同じく神となったという伝承が多く残されている。その反面、悪いモノとして登場する蛇の子を浜下りを行なうことによって流すという話も存在している。

## (2) 普天間宮

もう一方の普天間宮は、現在の宜野湾市普天間にある琉球八社のうちのひとつであり、普天間宮については『琉球神道記』のなかで縁起について記されている。権現は鍾乳洞内に祀られていたといわれている<sup>(32)</sup>。

普天満宮の普天満権現の伝説にはこのような由来がある。

首里桃原邑に、一人の処女がいました。

普通の人と違って、気高い上に、その美しさはすばらしいもので、この世にこんな美しい女が又といるかと思はれるほどでした。

この噂を聞いた若者たちは、われもわれもと結婚申しこみをするが、皆ことわられてしまいます。

処女はいつも一室にとちこもって、今まで一度も他人に顔を見せたことがございせんが、処女の妹の夫が、大へん珍しがり、「お前の姉さんは、人眼にふれるのをさけて外に出たこともないというが、私はお前の夫でもあり、他人でもないから見せてもいいでしょう。

どうかお前の姉さんを一眼だけ見せてはくれまいか。」

と妻に願いました。

「姉さんは何処か人間ばなれしたとがございます。もし、このことを話したら怒つて、ことわるにきまつています。

私が今日家にかえつて、姉さんと話をしている時ヒヨツコリはいつてきて、御覧になつて帰つていらつしやい。」

と相談し、妻は一足さきにゆきました。

妻の家で、姉妹が仲よく話をしている所から、妹の夫がはいつてきたので、姉は、そのまま、家を飛び出してしまいました。

家の人々が、すばやくその後を追つてゆきましたが、とうとうその姿を見失つてしまいました

た。

処女は、普天間までゆき、洞内にはいつて今までの人間の姿を消したのでございます。

人々は洞内にはいつて、すみずみまで探しましたが見つからず、その後、神性の純潔な処女を多くの人達は、皆尊んで神とあがめ、お祈りをする時は、かならずここにおまいりして願立をいたしました<sup>(33)</sup>。

これは娘が女神となったという話である。また、普天満権現由来の話の類話では、娘が家から普天満宮の洞穴に逃げていく際に紡いでいた芭蕉の糸を持って洞穴まで逃げていく話が存在する。おそらくではあるが、この娘が持っていた芭蕉糸が蛇髻入と結びついたのでないかと考えられる。

この話から女神となった娘がノロ、つまり神女であった可能性が見えてくる。

もともと沖縄ではセジ（霊力）とよばれる神に近づいて接触し、神の力を引き出す能力というのは男性よりも女性の方が優れていると考えられていた<sup>(34)</sup>。そして、琉球のすべての女性たちは神女的もしくは神的素質を生まれながらに持っているものであると信じられていた。そういった考えが最も顕著に現われているのが、「ヲナリ神」である。ヲナリというのは琉球語では姉妹のことをさし、姉妹は兄弟の守護神であると信じられており、その姉妹たちを神格化させたものが「ヲナリ神」なのである<sup>(35)</sup>。実際に民話や昔話を探してみると、姉妹が距離の離れている兄弟の危機を知って夢のなかで兄弟を助けるという話はたくさんある。また、沖縄の神女は神を自らの身体に降ろした際、神女は人間として民衆の前に現われるのではなく、神そのものとして現われて神の託宣を聞いたとされている<sup>(36)</sup>。このことから普天間権現由来に登場している娘というのは神女であったのではないだろうかと考えられる。

中央や地方の神女たちの組織化が顕著となったのが第一尚氏王統時代(1406～69年)の頃であり、神女組織が本格的に確立されたのは第二尚氏王統時代の三代目尚真王(1477～1526年在位)の頃であった<sup>(37)</sup>。

聞得大君は神女のなかでも最高の神女のことを

さし、王の姉妹が主に任命されていた。聞得大君は琉球国王の就任の祝福と国家安泰・繁栄を祈願したとされ、初代の聞得大君は尚真王の妹であった<sup>(38)</sup>。また、聞得大君が最高神女として公的地位を占めたのは上記にも書いたように第二尚氏王統時代以後のことであった<sup>(39)</sup>。

琉球王国が薩摩によって侵略され支配されるようになってからは、大量のお金がかかるとして神女による王権儀礼の縮小や君々の削減といった政策によって、徐々に神女たちの政治への影響力が低下していったのである<sup>(40)</sup>。

### (3) 蛇髻入とキンマモン

ここでもう一度キンマモンに関する史料をみていくことにする。第1章の引用部分でも記したように、キンマモンが出現するとされたのは3月・6月・9月・12月であるとされている。一方で、浜下り由来の話を始め、沖縄の蛇髻入のなかで胎内に宿っている子どもを流産させる話で登場する儀礼の浜下りは3月3日に行なわれており、キンマモンの出現する月である3月と被っているのがわかる。そしてキンマモンは聞得大君と関連して出現していることから神女との関係性は密接していると考えることが出来、蛇髻入で蛇の棲家とされている場所も神女との関連性をみることができる。

また、キンマモンというのは海底に住んでいると『琉球神道記』で記載されていた。この海底というのはニライカナイのことであろう。海底の宮として連想されるのは、龍宮である。その龍宮に住んでいるということからキンマモンは龍神と考えることができる。また、沖縄には昔話の一つに以下のような話がある。

蛇がね、ヤイガヤイガと泣いていたというのでね、

「どうして、お前は泣いているんだ」と、この人間は言うとな、

「私は、人には見られずに、天へ登って行く予定だよ——竜だよ、まあ、それは、ね、

そのようにね竜になる予定だったはず——「それなのにね、もう、見られてしまった」

と、泣いているので、

「私は、(たった)一人だけでね見たのだよ、一人だけが見ても登れないのか」と(言っ  
て)いる。

「いいや、私は、無口なものだ。誰にも、言わず、この口から外には、出さず、いるから、(それでも)だめなのか、登れないのか」と言うよね、

「あんただけが、ほんとうに、この口から外へ出さずに、いるならば、登ることができる、(天に)行って竜になることができる」と、言ったそうだ。約束したので、蛇は天に登って行ったそうだ。

(男は家へ)来てからは、孫や、子守りなどにも、老人になるまで、全く(そのことを)物言わずにいるうちは、(何事もなく)平穩にいてね、今からなら(言っても)、何でもないだろうと(思っ)、何十年かなってから、「私なんぞは、そのような、こともね、あったんだよ」と、言ったそうだ。そうした当夜、つき白の大きさ〈太さ〉くらいの、蛇がね、切り刻まれて、庭に落ちて山積みしたので、まあ、それを持って行って、捨てかねていたそうだ、との話もねあるんだよ<sup>(41)</sup>。

これは蛇が天に昇って龍になったという話である。この話からも蛇と龍が同一視、あるいは蛇から龍への転換が行なわれていることがわかる。また、蛇が空から落ちてきたことから、龍が零落したものが蛇であるという示唆に繋がるのではないだろうか。また、この話の類話として、蛇が貧乏の男に昇ろうとしたことを見られたので、誰にも話さなければ龍になれ、龍になれたら宝物を与えて金持ちにするという約束をする話がある。

上記のような話から、蛇は龍になると琉球では考えられており、龍になった蛇が空に昇って行く描写からも竜神が天神として機能していると思われる。その一方で海底の宮は龍宮と考えられ、そこに住んでいるのは龍神つまり海神であったとできることから海神と天神の同一視はあり、蛇と関連していったのではないかと思われる。

## 終わりに

キンマモンは現在の沖縄の祀られている神や祭祀からも分かる通り浸透しておらず、琉球独自の神であるはずのキンマモンが忘れ去られている。しかし、沖縄に存在する蛇髣入の話を見るに、儀礼の時期とキンマモンの出現の一致や海や蛇、そして神女との関連性を持っていることからキンマモンと沖縄の蛇髣入の関係性は深いといえるだろう。

## 注

- (1) 弁蓮社袋中・原田禹雄 訳注『琉球神道記 一附・自筆稿本影印一』榕樹書林, 2001, 4 頁
- (2) 古橋信孝・三浦佑之・森朝男『古代文学講座 11 霊異記・氏文・縁起』勉誠社, 1995, 255 頁
- (3) 同上, 256 頁
- (4) 前掲 1), 236 頁
- (5) 同上, 237-238 頁
- (6) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典 第 7 卷』吉川弘文館, 1986, 528 頁
- (7) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典 第 9 卷』吉川弘文館, 1988, 497 頁
- (8) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重『琉球史料叢書 第五』井上書房, 1962, 13 頁
- (9) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典 第 6 卷』吉川弘文館, 1985, 186 頁
- (10) 前掲 7), 497 頁
- (11) 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重『琉球史料叢書 第四』井上書房, 1962, 21-22 頁
- (12) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典 第 4 卷』吉川弘文館, 1984, 252 頁
- (13) 球陽研究会『沖縄文化資料集成 5 球陽 読み下し編』角川書店, 1995, 93-95 頁
- (14) 嘉手納宗徳『沖縄文化史料集成 6 球陽外巻 遺老説傳』角川書店, 1978, 161 頁
- (15) 同上, 167-168 頁
- (16) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典 第 14 卷』吉川弘文館, 1993, 593 頁
- (17) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』

琉球王権と神話の歴史地理学的研究

- 角川書店, 1997, 385 頁
- (18) 同上, 406-407 頁
- (19) 同上, 427 頁
- (20) 同上, 460 頁
- (21) 前花哲雄『神・神格偉人物語り』八島印刷, 1981, 46 頁
- (22) 伊波普猷「君真物の来訪」『をなり島の神々2』平凡社, 1973, 31 頁
- (23) 真喜志瑤子「キンマモンの神とその成立をめぐって—『琉球神道記』ほか諸説の検討—」『沖縄文化研究 第27号』法政大学沖縄文化研究所, 2001, 118 頁
- (24) 下野敏見「南西諸島の海神信仰」『ヤマト・琉球民俗の比較研究』法政大学出版局, 1989, 114 頁
- (25) 渡辺匡一「蛇神キンマモン—浄土僧袋中の見た琉球の神々—」『季刊文学 第9巻第3号』岩波書店, 1998, 74 頁
- (26) 角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』角川学芸出版, 2009, 169 頁
- (27) 佐々木高弘『民話の地理学』古今書院, 2003, 144 ~ 145 頁
- (28) 同上, 175-178 頁
- (29) 沖縄県教育委員会『沖縄県史 23 民俗2』国書刊行会, 1989, 15-16 頁
- (30) 平凡社地方資料センター『日本歴史地名体系 第48巻 沖縄県の地名』平凡社, 2002, 607-608 頁
- (31) 山下欣一・遠藤庄治・福田晃『日本伝説大系 15』みずうみ書房, 1989, 227-229 頁
- (32) 前掲 29), 318 頁
- (33) 琉球史料研究会『琉球民話集 全巻』琉球史料研究会, 1960, 52-53 頁
- (34) 湧上元雄・大城秀子『沖縄の聖地—拝所と御願—』むぎ社, 1997, 131 頁
- (35) 鳥越憲三郎『琉球宗教史の研究』角川書店, 1965, 235 頁
- (36) 同上, 304 頁
- (37) 宮城栄昌『沖縄のノロの研究』吉川弘文館, 1979, 109 頁
- (38) 前掲 32), 132-133 頁
- (39) 沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事

- 典 上巻』沖縄タイムス社, 1983, 828 頁
- (40) 渡邊欣雄・丘野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也『沖縄民俗辞典』吉川弘文館, 2008, 161 頁
- (41) 福田晃・佐渡山安公・下地利幸・岡本克江・山本清『城辺町の昔話 (上)』同朋舎出版, 1991, 167-168 頁

【参考文献】

比嘉政夫『沖縄の祭りと行事』沖縄文化社, 1993  
 桜井徳太郎『沖縄のシャマニズム』弘文堂, 1973  
 佐々木高弘『神話・伝説・昔話の場所表現に見る日本人の環境認知の変遷』京都学園大学, 2007

資料1～4は『神話・伝説・昔話の場所表現に見る日本人の環境認知の変遷』より引用。

【資料1】

沖縄県の「地名入・字源型」昔話一覧①

No.	昔話名	場所	種別	年代	備考
1	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
2	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
3	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
4	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
5	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
6	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
7	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
8	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
9	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
10	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
11	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
12	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
13	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
14	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
15	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
16	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
17	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
18	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
19	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
20	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
21	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
22	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
23	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
24	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
25	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
26	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
27	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
28	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
29	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
30	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
31	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
32	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
33	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
34	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
35	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
36	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
37	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
38	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
39	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
40	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	
41	龍宮の宝	龍宮	伝説	江戸時代	

